

世田谷文学館NEWS

SETAGAYA LITERARY MUSEUM



小堀杏奴《静物(雛飾り)》、油彩、1934年頃 世田谷文学館蔵

館長の作家対談

ゲスト 辻原 登(作家、神奈川近代文学館館長)

ではないかもしれないけれど、何かを表現することによって自分なりに克服しなくてはいけないという気持ちが強くなつた。あとは生活をどう立てていくかという問題で、それからが大変です。

25、26歳ぐらいで就職を考えたときは、ちょうど日本と中国が国交回復をした直後で、中国語のできる人が圧倒的に足りない状況でした。東京外国语大学でもおそらく中国語専攻者は少なかつたと思います。亀山さんの頃もそうでしょう。それが突然国交を回復して日本航空協定ができる、人の往来がものすごく増えると、語学のできる人材が必要になつてくる。僕はそこに目を付けて、中国語ができればどこかに潜り込めると思ったのです。

辻原▼はい。45年というと、そんな感じです。亀山▼『村の名前』は中国が舞台で、畳の原材料料の買い付けのために主人公が桃源郷に入っていますが、桃源郷というのは名ばかりで、く物語ですが、桃源郷というのは名ばかりで、そこは共産主義権力が支配するシステム化された、一種の全体主義的な世界なんですね。その世界が読者にそこはかとない不安と恐怖を呼び起こす。

『村の名前』の魅力というのは、一つはそこに描かれたさまざまなモチーフ、例えば主人公と中国人の女性の抱擁の場面であるとか、あるいは犬料理のできる宴会のシーンとか、あるいは車が止まるたびにスイカスイカと叫びながらラットホームに押し寄せてくる人たち。そういう個々のディテールにあります。ところが驚

うか、奔放さみたいなものがものすごく際立つたイメージとして表れてくる。でも、やはり物語を牽引しているテーマは何かと言つたら、人生そのものの持つ不思議さ、先ほど言つた予測不可能性だと思うのですね。そこでお聞きしますが、実際に中国を行き来したとき、辻原さんはシステムの恐怖というものを実感されていましたのでしょうか。

辻原▼ それは、否応なく実感させられました。縁が深いのか両親が戦前、上海にいたものです。から、僕は中国に対し非常にシンパシーがある。しかし、実際に中国で仕事をしていると、常にそれは意識の外には置けない状況になるのです。だからこそ、僕が常に意識したのは、ストエフスキーやカフカで、ドストエフスキーも

い経験があつたと仰いましたが、そうしたものは違う、一人の人間として年齢が積み上がっていくプロセスの中で、全体的なものに対するある種の恐怖と、同時に、逆の愛のようなもののが生まれたのかもしれない。それが例えば、最新の『陥罪』という小説などにも繋がっていく話、実は、先ほど控室で辻原さんがどうして土台なのではないかと思つたりします。今のこの話、も触れたいと仰つたアンド烈イ・プラトーノ夫（1899—1951）の『チエヴェングール』という小説とも繋がりますので、ここで少し触れておきたいと思います。革命初期、ソビエトで全体主義といいましょうか、体制がまだ十分にシステム化されていない時代、ものすごく不条理な事件や殺戮が起こるわけです。その世

う状況の中で、将来どうしたらしいのかという毎日を送っていたのです。それでドストエフスキーを読むわけです。トルストイやスタンダールを読んでも分からぬ。トルストイのアンナ・カレーニナの恋愛も、『赤と黒』のジュリアン・ソレルの恋愛も傑作だということは分かるのだけれど、全然身に染みてこない。だけど、ドストエフスキイの『地下室の手記』など色々読んでいると、実際の経験を超えた何か強烈なものが、あつてたたずたにされた、それが15、16歳の思春期のときで以後45歳まで続くのです。だから、普通の受験勉強をして大学に行き、就職することができなくなつた。食べていかなくてはいけないが、結局は表現者になりたかつたので

と求人が沢山来るのです。僕は30歳で初めて商社に就職し、15年間、中国奥地を回りながら畳の蘭草やウナギの稚魚を買い付けたり、釣り餌のゴカイを買い付けたり、松茸を探りに行っていた時期だつたのです。その間、猛烈に本を読みたくなり、何か書きたくなつた。でもそんな時間は全くなく、朝から晩までお客様を連れて中国を回るんです。ところが、早起きする仕事前に2、3時間の時間ができることに気づいたのです。そんなことは考えれば当たり前ですが、朝5時に起きれば本を読めるし、物が書けると思って、ちょうど湖南省・長沙に、畳の蘭草の仕事で2カ月程いたときに書き始めたのです。

種の全体主義、この言葉はあまり不用意に使いたくないのだけれども、ある見えない力に監視され、抑圧された世界なのです。その抑圧された社会そのものが下敷きにあって、その上にターヴー侵犯のモチーフが幾重にも重ねられていく。そしてそこから生まれてくる人々の生命の輝きに私は惹かれていたのだと思います。私自身何度もロシア体験を経る中で、システムというか全体主義体制の中で非常にストレスフルな留学生生活を送りました。ところが抑圧が強まれば強まるほどある種の自由というものの輝きみたいなものがヴィヴィッドに見えてくる。このようないい方ではかなり矮小化されてしまうのだけれども、その抑圧の岩盤と人間一人

亀山▼ 今、私が質問した理由は、システムといふか、全体主義的なある種の恐怖が、辻原さんの全小説の中に埋め込まれてしまつたといふか、完全に内面化されていると感じるからなんですね。その中で一種の人間の予測不可能性といふことに繋がるかもしませんが、人間の生命の優しさ、脆さといいましょうか、そういううござります。その中でペシミスティックなテーマが表れてくる。辻原さん

館長の作家対

ゲスト 聞き手
辻原 登 亀山郁
作家、 ロシア文学
神奈川近代文学館館長 世田谷文学館館長

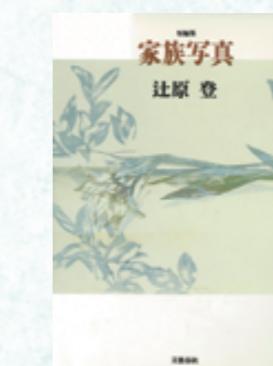
きつかけです。以来、辻原さんはどういう人、どういう作家なのだろうかと片思いのようになって、思い続けてきました。『村の名前』というタイトルに素朴な違和感を覚えたこともたしかですが、刊行の4年ほど前に映画『薔薇の名前』（1986年原作／ウンベルト・エーコ）が封切られており、そのタイトルとの比較から、『村の名前』という名付け方の魅力に改めて気づかされた記憶もあります。

私から最初に答えるようなものを出してしまいたいと思います。辻原さんの文学の根本テーマとでもいいましょうか、それは人生の予測不可能性をめぐる物語ということ。全ての小説がある意味この一言で整理できると言つてはおそらく失礼な言い方になりますが、でも巨大なモチーフ群を確実にこの言葉で包摂

ついてお話をさせていただきます。実は、辻原さんが小説『村の名前』を発表された当時、その書評を読んで非常に興味をそそられたのが

フスキューが「罪と罰」を書いた年齢です。いきなり作家としての円熟の頂点がデビューに重なったということです。ある意味で特権的な地位に辻原さんはいらっしゃった。だからこそこれまで全ての著作で驚くべき高さを發揮してきたのだと思います。では、その45年間は一体

村の名前
計應登



汁原 登(つじはら・のぼる)

1945年和歌山県生れ。1990年「村の名前」で芥川賞、1999年『翔べ麒麟』で読売文学賞、2000年『遊動亭円木』で谷崎潤一郎賞、2005年『枯葉の中の青い炎』で川端康成文学賞、2011年『闇の奥』で芸術選奨文部科学大臣賞受賞。他に『許されざる者』、『鞍馬の馬』、『冬の旅』、『寂しい丘で狩りをする』など著書多数。

うか、全体主義的なある種の恐怖が、辻原さんとの全小説の中に埋め込まれてしまつたといふか、完全に内面化されていると感じるからなんですね。その中で一種の人間の予測不可能性ということに繋がるかもしれません、人間の生命的の優しさ、脆さといいましょうか、そういうすぐくペシミスティックなテーマが表れてくる。辻原さんは先ほどは15、16歳のときに非常に幸いな経験があつたと仰いましたが、そうしたものとは違う、一人の人間として年齢が積み上がっていくプロセスの中で、全体的なものに対するある種の恐怖と、同時に、逆の愛のようなものが生まれたのかもしれない。それが例えば、最新の『陥罪』という小説などにも繋がつていく話、実は、先ほど控室で辻原さんがどうして土台なのではないかと思つたりします。今のこの話、も触れたいと仰つたアンド烈イ・プラトーノ夫（1899—1951）の『チエヴェングール』という小説とも繋がりますので、ここで少し触れておきたいと思います。革命初期、ソビエト全体主義といいましようか、体制がまだ十分にシステム化されていない時代、ものすごく不器用な事件や殺戮が起るわけです。その世

全体主義的なものに対する恐怖と愛

山さんが仰つたように45歳というと、ドストエフスキイーが『罪と罰』を書いた頃でしょう。これは大きな差です。大きな差というか、比べ物にならないですが。一番苦しかったのは人間にとつての変わり目、15、16歳の完全に心も体も入れ替わらなくてはいけないこの時期が一番危機的な状況でした。そこから本当に記憶が僕の中にあつて、それは非常にきつい記憶です。みんなそうだと思いますが、この年齢のときが危ないのです。本当に男も女も非常に危ないこの時期に、僕はドストエフスキイーと出会つたわけです。例えば父親や身内の死とか失恋だとか色々な経験が血肉化されていきますが、実際に体験したからそうなるわけではなく、僕の場合はドストエフスキイーを読んだということが、父親の死に出会う以上の強烈な体験で、そこから普通の生活ができなくなつた。

計原 登(つじはら・のぼる)

1945年和歌山県生れ。1990年「村の名前」で芥川賞、1999年『翔べ麒麟』で読売文学賞、2000年『遊動亭円木』で谷崎潤一郎賞、2005年『枯葉の中の青い炎』で川端康成文学賞、2011年『闇の奥』で芸術選奨文部科学大臣賞受賞。他に『許されざる者』、『韃靼の馬』、『冬の旅』、『寂しい丘で狩りをする』など著書多数。

森林書

『森林畫』1994年 文藝卷

『村の名前』1990年 文藝春秋

界、つまりソビエト、ロシアの舞台を描いた作品です。

辻原▼ 1920年代のことを書いた小説です

が、本当にすごい小説です。19世紀の後半が

ドストエフスキイ作品としたら、20世紀の前

半はこれだという感じの小説ですね。プラ

トーノフの代表作ですが、亀山さんは彼の『土

台穴』を翻訳されています、少し紹介を……。

亀山▼ そうですね。『チエヴェンゲール』は、死とは何かを探るうとして湖に身を投じた男を父

に持つひとりの青年が、共産主義の理想郷を求

めて遍歴する物語ですが、ラストがすごい。こ

こではこれ以上明かしませんが、プラトーノフ

を貫くテーマは、全体的なものに対する嫌悪

と愛。全体的なものが悪の仮面のように全面

的に立ち塞がるのか、それとも立ち塞がりなが

ら、人間の幸福とどう繋がっているのか。

ところで、この全体的な体制が常に自分を睨

んでいるという恐怖心は、事によるところ、辻原さ

んのある種の詩学というか、ポエティクスにも

深く繋がっているのかなと思います。『村の名

前』は、辻原さんの出発点ですけれども、最初

の長編小説は『森林書』です。おそらく辻原さ

んの小説の中で最も知られていない小説であ

りながら、最も熱度の高いものの一つだと思いま

す。そう言う私も、4分の1しか読めていない

のですが。『森林書』では私の故郷・宇都宮を

舞台に、ハム(Ham)無線通信で繋がる仲間た

ちのドラマが描かれています。その中の一人、唯

一の女性がヒロインとして最初に浮かび上が

てくる。そして、その女性と主人公との間にあ

る種の恋愛が生じ、これは不倫ですけれども、

その作り方が始まったという感じです。



す。つまり、自分ではいい気になつて、こういう小説を書いたという気持ちになつていていたところに、完全に全否定です。どうしたらいんだらうと。

亀山▼ 恐ろしい話ですね。

辻原▼ 恐ろしいですよ。今はそういうことはないですが、丸谷さんとか大岡昇平だと、ああいう人達に怒られて否定されたら、ほとんど全人格がなくなる程のショックです。もちろん尊敬しているからですが、どうしようとなつたとき、全然別のことやうと思つたのです。

それが読売新聞朝刊で連載した『翔べ麒麟』といふ、阿倍仲麻呂が活躍する歴史小説で実現したのです。『森林書』の書き方とは別的小説の作り方が始まつたという感じです。

亀山▼ 新聞小説というのは、ある意味で日本の近代小説の始まりといふか、夏目漱石にしろ、そういった人たちが一つの執筆のスタイルとしていたものです。まさにそこから近代の日本文学が生まれたと言つていい側面があると思います。新聞小説の作り方についてお話を伺いたいと思いますが、その前に『森林書』と『悪霊』について注釈しておきます。『森林書』では、足が悪いマリヤ・レビヤー・キナという、聖母マリアと同じ名前を持つ女性が出てきます。且つ、彼女は聖なる女性として「ユロージヴァヤ(神がかり)」と呼ばれるわけです。『ユロージヴァヤ』には語源的に「身体的な欠損を抱える」という意味が隠されており、まさにその聖性と身体的な欠損の象徴的な連関性に着目したのがドストエフスキイでした。ですから、この『森林書』を読んだとき、これは『悪霊』から来ているのではない

その女性は義足なのです。

辻原▼ くるぶしから下がない。

亀山▼ そのくるぶしから下がない女性と主人公の性愛の場面が非常に印象的で、極めてあつさりとした描写なのですが、しかし、かなり濃密なディテールが含まれている。初めての長編小説で足の悪い女性と主人公の性愛の場面を描くのは、ものすごく勇気の要ることだったと思

いますね。初期の辻原さんの小説には、他に私は何かを探るうとして湖に身を投じた男を父に持つひとりの青年が、共産主義の理想郷を求めて遍歴する物語ですが、ラストがすごい。こ

こではこれ以上明かしませんが、プラトーノフ

を貫くテーマは、全体的なものに対する嫌悪

と愛。全体的なものが悪の仮面のように全面

的に立ち塞がるのか、それとも立ち塞がりなが

ら、人間の幸福とどう繋がっているのか。

ところで、この全体的な体制が常に自分を睨

んでいるという恐怖心は、事によるところ、辻原さ

んのある種の詩学というか、ポエティクスにも

深く繋がっているのかなと思います。『村の名

前』は、辻原さんの出発点です。おそらく辻原さ

んの小説の中で最も知られていない小説であ

りながら、最も熱度の高いものの一つだと思いま

す。そう言う私も、4分の1しか読めていない

のですが。『森林書』では私の故郷・宇都宮を

舞台に、ハム(Ham)無線通信で繋がる仲間た

ちのドラマが描かれています。その中の一人、唯

一の女性がヒロインとして最初に浮かび上が

てくる。そして、その女性と主人公との間にあ

る種の恋愛が生じ、これは不倫ですけれども、

その作り方が始まつたという感じです。

亀山▼ 恐ろしい話ですね。

辻原▼ 恐ろしいですよ。今はそういうことはないですが、丸谷さんとか大岡昇平だと、ああ

いう人達に怒られて否定されたら、ほとんど全人格がなくなる程のショックです。もちろん尊

敬しているからですが、どうしようとなつたとき、全然別のことやうと思つたのです。

それが読売新聞朝刊で連載した『翔べ麒麟』といふ、阿倍仲麻呂が活躍する歴史小説で実現したのです。『森林書』の書き方とは別的小説の作り方が始まつたという感じです。

亀山▼ 新聞小説というのは、ある意味で日本の近代小説の始まりといふか、夏目漱石にしろ、

そういった人たちが一つの執筆のスタイルとしていたものです。まさにそこから近代の日本文学が生まれたと言つていい側面があると思います。

新聞小説の作り方についてお話を伺いたいと思いますが、その前に『森林書』と『悪霊』について注釈しておきます。『森林書』では、足が悪いマリヤ・レビヤー・キナという、聖母マリアと同じ名前を持つ女性が出てきます。且つ、彼女は聖なる女性として「ユロージヴァヤ(神がかり)」と呼ばれるわけです。『ユロージヴァヤ』には語源的に「身体的な欠損を抱える」という意味が隠されており、まさにその聖性と身体的な欠損の象徴的な連関性に着目したのがドストエフスキイでした。ですから、この『森林書』を読んだとき、これは『悪霊』から来ているのではない

もここにあるのではないですか。

辻原▼ 『森林書』は、文芸誌「文学界」に連載し

ましたが、それは僕にとって芥川賞受賞後初の長編小説で、やろうとしたのはとにかく挑戦的というか、読者を驚かすような作品を書いて

みた。仰つたように、『村の名前』は監視社会ですが、『家族写真』は実にウェルメイドなほろ

いですけれども、少し思い切つたことをしてみようと思いました。

僕は15、16歳のときにユートピアに興味がも読者を挑発するというか、これもまた単に性愛の描写だけではなく、ありとあらゆる手段を用いて読者を挑発しようという意欲が漲つて

いる。どのようにしてこの小説が生まれたか、紹介して頂きたいです。つまり、今ある辻原さんの作家としてのスタイルの出発点がここにあるわけですが、辻原さんの作家的変貌の出発点

も読者を挑発するというか、これもまた単に性愛の描写だけではなく、ありとあらゆる手段を用いて読者を挑発しようという意欲が漲つて

いる。どのようにしてこの小説が生まれたか、紹介して頂きたいです。つまり、今ある辻原さんの作家としてのスタイルの出発点がここにあるわけですが、辻原さんの作家的変貌の出発点

も読者を挑発するというか、これもまた単に性愛の描写だけではなく、ありとあらゆる手段を用いて読者を挑

世田谷文学館カレンダー

2024年4月～9月

Setagaya Literary Museum April - September 2024

企画展

伊藤潤二展 誘惑

JUNJI ITO EXHIBITION: ENCHANTMENT

2024年4月27日(土)～9月1日(日)

* 混雑時は入場制限あり

美しくもグロテスクな世界を描き出す漫画家・伊藤潤二。

独創性あふれる作品は国内外の読者の心をゆさぶり、全世界を熱狂の渦に巻き込んでいます。

本展は伊藤潤二初の大規模な個展として、自筆原画やイラスト、絵画作品を展示します。デビュー作品の『富江』をはじめ、『うずまき』『死びとの恋わざらい』『双一』などのシリーズ漫画のほか、『首吊り気球』などの短編作品の自筆原画に加え、本展描き下ろしの新作も公開します。

人間の本能的な恐怖心や忌避感を巧みに作品に映し出しながらも、日常と非日常、ホラーとユーモアを自在に行き来する伊藤の作品世界に“震える”ひと時をお楽しみください。



伊藤潤二《富江》2000年
©ジェイアイ/朝日新聞出版

[観覧料]

一般 1,000(800)円 / 65歳以上・大学・高校生 600(480)円 / 小・中学生 300(240)円 / 障害者手帳をお持ちの方 500(400)円(但大学生以下は無料)。

* ()内は団体割引と「せたがやアーツカード」割引料金。

展覧会チケット

オンラインチケット及び当日券を販売いたします。

* オンラインチケットの詳細は、世田谷文学館ホームページ
(<https://www.setabun.or.jp/>)をご覧ください。

* 電話でのご予約は受け付けておりません。

Special Exhibition

JUNJI ITO EXHIBITION: ENCHANTMENT

April 27th (Sat) - September 1st (Sun) 2024

* admission may be subject to restrictions at busy times.

Admission Fees

General admission: ¥1,000 (800); Over 65 / College or High School Student: ¥600 (480); Junior High and Elementary School Student: ¥300 (240); Disability certificate holders: ¥500 (400) yen (Disability certificate holders of college age and below are admitted free of charge)

* Amounts in parentheses group discounts and reduced rates for holders of the Setagaya Arts Card.

Exhibition Tickets

Online tickets and same-day tickets are available.

* For details regarding online tickets, please see the SETAGAYA LITERARY MUSEUM website (<https://www.setabun.or.jp/>).

* We cannot accept phone inquiries.

利用案内

開館時間: 10時～18時(展覧会入場は17時30分まで)

休館日: 毎週月曜日(月曜が祝日の場合は開館し翌日休館)

割引料金: 企画展・コレクション展とともに

団体(20名以上)は2割引。

* 団体利用は事前にお問合せください。障害者手帳をお持ちの方は一般料金の半額。

世田谷区内在住在校の小・中学生は、土曜、日曜、祝・休日、夏休み期間中のコレクション展は無料。

交通案内:

京王線「芦花公園」駅南口より徒歩約5分

京王線「千歳烏山」駅南口より徒歩約13分

小田急線「千歳船橋」駅より京王バス(千歳烏山駅行)「芦花恒春園」下車徒歩約5分



* 5月10日(金)は65歳以上の方は入場無料。
* 5月15日(水)は「国際博物館の日(5/18)」を記念して入場無料。
* 掲載の催事は変更や延期になる場合があります。ご確認の上お出かけください。

* May 10th (Fri): free admission for over 65s.

* May 15th (Wed): International Museum Day, free admission.

* Schedule may be subject to change or postponement. Please confirm before your visit.

前期コレクション展

巴里土産 小堀杏奴油彩画展 ~滞欧作を中心~

2024年4月20日(土)～9月1日(日)

* 混雑時は入場制限あり

森鷗外の次女として生まれ、『晩年の父』(1936)、『朽葉色のショール』(1971)などで知られる小堀杏奴(随筆家 1909～1998年)は、幼少期から絵を描くことを好み、画家の長原孝太郎や藤島武二の下で油彩を学びました。32年から翌年にかけて、パリのアカデミー・ランソンへ通いながら画業に励み、帰国後は藤島の弟子の画家・小堀四郎と結ばれます。家庭を営むことで杏奴自身の画家としての歩みは半ばとなりましたが、その作品は世田谷区梅丘の旧宅に長年保管されてきました。

本展では、ご遺族から寄贈いただいた杏奴若き日の油彩作品とあわせ、森鷗外家族資料(パリから母や姉に送った書簡等)を通して、小堀杏奴の生き生きとした画学生生活と、家族との深い絆もご紹介します。



小堀杏奴《街の風景(公園の子どもたち)》油彩 1933年頃 世田谷文学館蔵

[観覧料]

一般 200(160)円 / 大学・高校生 150(120)円 / 65歳以上・小・中学生 100(80)円 / 障害者手帳をお持ちの方 100(80)円(但、大学生以下は無料)。

* ()内は団体割引と「せたがやアーツカード」割引料金。

同時開催 ムットーニコレクション

Setagaya Literary Museum First Half Collection Exhibition

Souvenirs from Paris: Oil Painting by Anne Kobori - Centering on Pieces Created During her Time in Europe

April 20th (Sat) - September 1st (Sun) 2024

Concurrent Exhibition: Muttoni Collection

* admission may be subject to restrictions at busy times.

Admission Fees

General admission: ¥200 (160) / College or High School Student: ¥150 (120) ; Over 65 / Junior High and Elementary School Student: ¥100 (80) ; Disability certificate holders: ¥100 (80) yen (Disability certificate holders of college age and below are admitted free of charge)

* Amounts in parentheses group discounts and reduced rates for holders of the Setagaya Arts Card.

Visitor Information

Opening Hours: 10:00 am to 6:00 pm (last admission 5:30 pm)

Closures: Every Monday (Closed Tuesday when a national holiday falls on Monday)

Group Discount: Groups of 20+ visitors will receive a 20% discount on admission fee both collection and special exhibitions.

Disability certificate holders will be admitted at 50% the general rate. Elementary and junior high school students, who studies or resides in Setagaya city, are admitted free on weekends, national holidays, and during the summer holidays.

Access:

about 5-minute walk from Roka-koen Station's South Exit (Keio Line)

about 13-minute walk from Chitose-karasuyama Station's South Exit (Keio Line)

about 5-minute walk from Roka Koshunen (take Keio Bus from Chitose-Funabashi Station [Odakyu Line] towards Chitose-karasuyama Station [Keio Line])

公益財団法人せたがや文化財団 **世田谷文学館** SETAGAYA LITERARY MUSEUM

〒157-0062 東京都世田谷区南烏山1-10-10 1-10-10 Minami Karasuyama, Setagaya-ku, Tokyo 157-0062

Tel. 03-5374-9111

<https://www.setabun.or.jp/>

* 資料受贈報告は、次号にてご紹介させていただきます。